



友 Yu-Ai 愛

2025年 第165号

理事長: 立花志瑞雄

館長: ブラッドリー&スーザン・コックス

〒730-0842 広島市中区舟入中町11-13 クレール舟入中町302

TEL 082-503-3191

Email: office@wfchiroshima.org Website: www.wfchiroshima.org

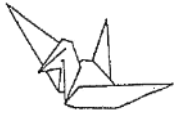
Website



Facebook



「シュモーフファミリー」歓迎会	西村宏子	2
広島・長崎世界平和巡礼60周年記念パネル展2	立花志瑞雄	3
60周年記念パネル展2 トークイベント	服部淳子	4
韓国PAX2025報告 -過去・現在・未来-	立花志瑞雄	5
韓国PAX2025ご報告	服部淳子	7
韓国PAXに参加者して	ソン・チャンフン	9
韓国PAX参加者／ホスト振り返り リュ・ヘソン／スー・コックス		10
平和を築く友情	コリス・シー	11
WFC60周年記念	高杉ゆかり	12
WFC60周年に寄せて	田中ゆき子	13
WFCでのインターン	N.T.トラン	14
8月6日 被爆証言とマーシャル諸島から報告	田口知鶴子	15



シュモーフAMILY歓迎会

シュモーに学ぶ会 西村宏子



～トム・ファミリー歓迎会に参加して～

2月17日、シアトルから来られたトムさんご家族の歓迎会がWFCさんで開かれました。お声がけをいただき有難く参加させていただきました。私とトムさんご夫妻は2019年にシアトルでお会いしていることもありまずは再会を共に喜びました。

歓迎会では、トムさんのおじいさまで被爆者のために家を建てる活動をしたフロイド・シュモーさんの思いを絵本にした『シュモーおじさん』（シュモーに学ぶ会発行）を朗読と演奏を聴いていただきました。

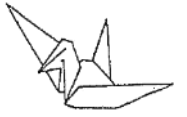
このパフォーマンスは平和への想いを音楽で表現しようと結成した「シュモーズ」としての取り組みです。「シュモーズ」の名前はもちろんフロイド・シュモーさんに由来し、歌、キーボード、尺八で様々なジャンルの曲に挑戦しています。今回、演奏したなかの2曲は、シュモーさんをイメージしたオリジナルで、復興期の広島に希望と微笑みをもたらしてくれたことへの感謝の気持ちを曲にしたものです。そして、トム・ファミリーの皆様にご心からの歓迎の気持ちを込めて演奏しました。トムさんからは、「ありがとう。とても素晴らしいパフォーマンスだった。特に尺八の演奏を楽しんだ。」との言葉を頂戴し、日本古来の楽器の音色と文化にも触れていただけたことをメンバー全員で大喜びしました。

この歓迎会に参加して、何より感動的で素晴らしかったことはWFCの館長さんご夫妻とWFCの方々の心からのおもてなしです。国も宗教も世代も違うみんなが、一つのテーブルを囲み、手作りのぜんざいをご馳走になりました。トムさんを始めご一家の皆さん大好きだそうで、そのお顔は絵本の中に出てくるシュモーおじさんが大好きなジャムを食べるときと同じ顔でした。部屋いっぱい笑顔の輪が広がり、とても和やかで心温まる時間であったことは言うまでもありません。1949年にシュモーさんが広島にもたらしてくれた希望の架け橋は時を超えてなお受け継がれていくのを感じ、胸が熱くなりました。

WFCの皆様のおかげでこのような機会に恵まれたことに感謝するとともに、準備段階から献身的に取り組まれた皆様のお働きに学ばせていただきました。

心よりお礼申し上げます。





広島・長崎世界平和巡礼60周年記念パネル展2

立花志瑞雄

広島・長崎世界平和巡礼60周年記念パネル展2が、2025年3月18日～23日まで、NHK広島放送局の展示ギャラリーで開催されました。さまざまな形でのみなさまのご協力に感謝いたします。6日間で延べ229人の方にお越しいただきました。遠くは福岡から来られた方もありました。NHKの側を通り、看板を見て入ってくださった方もありました。親が被爆したと話してくださる方が結構おられ、バーバラさんのことや世界平和巡礼のことを知らなかったのも、よかったと話しておられました。また、資料の大切さについて共感してくださる方もありました。

今回のパネル展では、前回パネル展示した資料に加えて、新しい資料の展示を行いました。そのなかには、巡礼団のメンバー庄野直美先生とオープンハイマーとの面会に関わる資料や通訳として参加された大学生の残された資料も含まれます。原物展示した新資料には、巡礼団メンバーの山田信蔵さんが英語で書かれた“An Appeal to Reason（「理性への訴え」）」があります。「理性への訴え」の一文を紹介します。

「確かに私たち人間は理性を持っているが、常に理性に従って行動しているわけではなく、しばしば感情に従って行動し、暴力に訴えることさえある。いくら私たちが平和を強く唱えても、各国が武器を持っている限り、私たちは安穩としていられない。なぜなら、戦争が勃発すれば、長期的にはすべての武器が使用されるからだ。私たちは、武器は私たちを自滅に導くものであり、恒久的な平和を勝ち取るための最も根本的な方策は、世界のすべての国々の軍縮であることを忘れてはならない。」



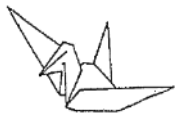
広島・長崎世界平和巡礼60周年記念パネル展2
2025年3月18日～23日

最後にアンケートより、反響をご紹介します。

- ・核兵器が未だなくならないどころかいつ使用されてもおかしくない状況です。それでも実際に使用されないのは、この展示にあるように、根気よく世界中を巡って訴え続けた方々のおかげだとよく理解できました。

- ・貴重な資料を見ることができ、とても勉強になりました。やはり資料・史料は残されなければなりません。

- ・先人たちの思いをつないでいくバトンを一人一人が受け取り、各々ができることを話していくことが、大切だと改めて思いました。一市民として何ができるか考えます。



パネル展2トークイベント

服部淳子

世界平和巡礼60周年パネル展2の会期中の3月20日「平和使節交換(PAX)の今までとこれからについて」と題し、広島からPAXに参加された方々の中から、次の5人の方に登壇頂き、共通する事前の質問(次の問①～④)をガイドにお話をいただく公開トークイベントを開催しました。お話しいただく方に事前にお送りした4つの質問は、①PAXに応募された動機、きっかけ／②ご自身にとっての印象深い体験とそれを通して学ばれたこと／③会場で伝えたいメッセージ／④これからのPAXに期待すること、でした。

5人それぞれが原稿や写真を事前にご準備くださり、ご自身の人生のテーマとPAX体験と平和への想いと深いつながりをお話くださり、特に印象的な体験を経て自分の平和観と平和に関連する活動がいかに変わったか、この学びを通して特に皆さんに伝えたいこと等について、まさに珠玉のメッセージに心を込めて語ってくださいました。また、会場にお集まりの高校生から社会人の様々な年代の方々45人も熱心に耳を傾けておられる姿が非常に印象的でした。TVや新聞の取材もあり、崇徳高校新聞部の皆さんも積極的に発表者にインタビューされており、頼もしく拝見しました。

【発表者とトピックのご紹介(発表順)】

渡辺朝香さん ドイツPAX2001年
田口知鶴子さん 韓国PAX2009年
尾崎美栄子さん 韓国PAX2016年
小泉直子さん アメリカPAX2013年
砂脇眞理子さん アメリカPAX2023年



【イベントの概要】 日時: 2025(令和7)年3月20日(木・春分の日) 14時～15時45分

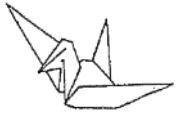
会場: エソール広島 研修室1・2 (入場無料、事前申込) <第1部 発表 第2部 質疑応答等>

【開催の背景】1962年バーバラさんが松原美代子さん、英宏昌さんと核保有国を含む12か国の各都市で被爆者の実情や核実験反対・反核を訴えた「平和巡礼」—その体験で得られた気づきから「世界平和巡礼」が生まれました。巡礼で出会う人々との対話と交流を大切に平和の礎を築く—その志をWFC設立後、自発的な使節交換プログラムとして引継ぎ、青年平和セミナー、教師交換プログラム、そして平和使節交換プログラム(対象国:アメリカ合衆国、韓国、ドイツは2004年度で終了)と継続し、これまで延べ約300名が参加。今年度は、5月1日～6日韓国からの平和使節団を受け入れ、9月19日～10月3日アメリカに平和使節団を派遣します。

【開催の目的】(1)60周年パネル展を機に、被爆の実相を伝え、草の根の交流を通して平和づくりに努めてきたPAXの活動をより多くの人に知って頂き、私たち一人一人が、どのように被爆体験を伝えていくのか、平和を築いていくかを考えるきっかけにして頂くこと、(2)これまで各PAX参加者には単回の帰国報告会で体験を共有いただく機会はありませんでしたが、今回「異なるPAXの参加者が一堂に会し、共通した問いをもとに発表いただくことで見えてくるPAXに通底する意義や参加者個人としての想いや学びを会場で共有し、PAXへの想いを高めて頂くこと。



終了後、「普段改めて聞けない貴重な体験と学びが聞けた。」「多くの気づきがあり、新たな元気をもらえた。」「様々なPAXの参加体験と生きた言葉から大切なものが見えてきた。」等の反響を聞くことができました。また「第2部では、もう少し会場で話し合う時間がほしかった。」とのご意見もうかがいました。次の機会に活かしたいと思います。発表くださった皆様、参加くださった皆様、有り難うございました。



韓国PAX2025報告 -過去・現在・未来- 立花志瑞雄

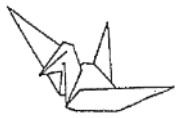
5月1日～6日の日程で、実施された韓国PAX(平和使節交換プログラム)2025は、無事に終了しました。参加、ご協力いただきましたWFCコミュニティーのメンバー、訪問させて頂いた先の皆さま、証言やガイドをしてくださったに皆さまに、感謝申し上げます。今回の韓国からメンバーは、リーダーのリュ・ヘソンさん、ユ・ミンソさん、ソン・チャンフンさん、キム・キチャンさん(5月1日～3日の3日間参加)、ペ・ヒョンミン(修復的正義の講師)・パク・ミンジさん夫妻、チョン・ナンチョさん・チェ・ユンギョンさん親子の8名で。ホストファミリーを松本滋恵さん(2019年訪韓メンバー)、キャパー敬子さん(2024年訪韓メンバー。娘の実生さんは2019年に参加)、山根美智子さん(2013年訪韓メンバー)、ブラッドリー&スーザン・コックスさん(WFC館長)が引き受けてくださいました。そして忘れられないのは、プログラムと一緒に参加し、写真を撮り、SNSに投稿してくれた香港からの旅するボランティア、コリスさんです。



5月1日 午前中広島空港に予定より早く到着した一行は、リムジンバスに乗り広島市内へ。出迎えてくれた理事の車でWFCへ。お昼はピースクワイアのメンバーを中心に、歓迎のポットラックランチ。韓国語での歌も心ませるものとなったでしょう。ブラッドがWFCやバーバラのことを話してのオリエンテーション。平和公園まで歩いて、バーバラ碑を訪れ、原爆資料館の見学をしました。その後、4日間お世話になるホストファミリーのお宅へ。

5月2日 午前中広島朝鮮学校に訪問させて頂きました。今回のプログラムの中で一番印象に残ったとメンバーの多くが話してくれました。保育園から高等部まで、クラスを見学し、校長先生から朝鮮学校のおかれている現状についてお聞きし、三つのグループに分かれ、中等部、高等部の生徒たちと昼食の時間を過ごしました。午後は縮景園の散策。WFCコミュニティーのメンバーである砂脇眞理子さん、山縣八寿子さんにお世話になりました。その後、夕方の被爆証言の時間まで自由時間。WFCで広島県朝鮮人被爆者協議会会長の金鎮湖さんのお話を聞きました。金さんは胎内被爆者です。直接朝鮮語で話していただき(朝鮮学校でも同様)、よりお話が伝わったのではないかと思います。





5月4日 午前中広島女学院高校署名実行委員会2年の藤田彩花さん、本倉鳳羽さんの二人が、平和公園の碑巡り英語ガイドをしてくれました。事前にWFCに来てくれて、館長のスーさんからガイド学習のサポートしてもらったりしながら、一生懸命準備をしてくれました。昨年韓国PAXに参加後、今年は大学生になり、広島に帰省しているメンバーも、3日に続いて自主的に参加してくれました。昼食はWFC近くでお好み焼き。午後は四日間を振り返って、私にとっての日本・韓国とは、特に心に残った体験や言葉を共有し、サークル(車座)になって語り合う時間を持ちました。

5月5日 過去の異なる年に韓国PAXに参加したメンバーや英語クラスのメンバーも加わり、宮島観光を楽しみました。宮島は連休で多くの人が訪れていましたが、その風景と自然と、また調和した文化遺産と名跡の建築美を満喫する時間となったようです(お弁当を鹿に狙われるというハプニングもあったようですが…)。この日はPAXメンバー全員がWFCに宿泊。キッチンで、皆で一緒にカレーを作り、夕食会の後は、それぞれが韓国PAXを通して感じたことを分かち合いました。長年の友情の徴に、WFCに記念の盾を頂きました。最後の夜も広島駅のミナモアに行くメンバーも。



5月6日 韓国PAX期間中天候に恵まれましたが、帰国の日は雨。しかし、心は快晴。それぞれの胸に様々な思い、思い出が残ったことでしょう。

韓国PAXが始まったのは2003年です。それ以来22年にわたって、相互に訪問し合い、過去に学び、交流を続けてきました。初日のポットラックランチでの歓迎ぶりに驚かれた韓国からのメンバーの方がおられました。私自身二度韓国を訪問した経験があり、韓国のみなさんから受けた暖かいもてなしの心を忘れることはありません。韓国から来られたみなさんも同様に、ホストファミリーのみなさん、WFCのメンバーから受けたもてなしを忘れられることはないでしょう。

写真は韓国PAXメンバーから頂いた感謝の気持ちを込めて贈られた記念盾です。「平和に向けたWFCの努力と献身に深く感謝いたします。WFCとピースビルの両機関の長年の友情に感謝を伝え、平和に向けた連帯がさらに強化されることを願う気持ちを込めます」と記されています。

しかし、これは一朝一夕にもたらさせたものではありません。これまで韓国を訪問したみなさん、韓国からのメンバーのホストファミリーとして、韓国からの人たちをもてなして下さったみなさん、韓国PAXの企画・運営に関わったみなさん、プログラムを支えてくださった皆さんのお陰です。

そして、WFCと韓国のピースビルの関係はこれからも続きます。そのためには担い手となってくれる人たちの存在、互いに学び合うことを通じて、得たものを引き継いでいく努力が必要です。今回の韓国PAXでは、過去韓国PAXプログラムに参加し、ホストファミリーを引きつけて下さった方、プログラムの一部に帯同してくれた方や、昨年の参加メンバーで、ゴールデンウィークの帰省の合間に参加してくれた若い方達がいきました。ワークショップと交流の集いには、昨年の参加者の後輩、崇徳高校新聞部のメンバーが参加し、平和公園ガイドは、女学院高校署名実行委員会のメンバーが英語での案内に挑戦してくれました。WFCが韓国PAXを通じて、積み重ねてきたもの、培ってきたものを周りの方達と共有し、今後も引き継いでいきたいと思えます。

今回のプログラムの中で特徴的だったのは、広島朝鮮学校の訪問、在日の方から被爆証言を聞くことでした。韓国から参加したメンバーが今回のPAXで印象的だったこととして挙げてくれました。核兵器廃絶の原点が被爆であるように、朝鮮半島出身者の人たちが、なぜ被爆しなければならなかったのかという韓国の人たちと私たちの関係性の原点を私たちはこれからも忘れてはならないと思います。被爆者の方達も高齢化しPAXへの参加が難しくなっています。同様のことは韓国にもあてはまります。昨年は、ナムムの家のハルモニたちが入院されていたために、ハルモニたちに会うことができませんでした。韓国PAXは、互いに学び合うことを大切にしつつも、新たなステージへと進む時を迎えています。



友 Yu-Ai 愛

韓国PAX2025ご報告： 5月3日「修復的正義についてのワークショップ」と「交流」、
4日午後「4日間の体験ふりかえりのサークル」（思い出に残る言葉と体験、私にとっての日本
と韓国）
服部 淳子

5月3日（土） 韓国PAX2023に続いて、WFCで開催する2度目の韓国の実践から学ぶ「修復的正義」についての午前中の公開ワークショップと、午後PAX参加者と小班に分かれて車座で交流を体験するプログラムを各2時間、エソール広島で開催しました。「修復的正義」（RJ）は、韓国では「回復的正義」と呼ばれます。韓国の平和ビルの活動共同体（KOPI／平和ビルで生活する平和構築・平和教育活動に関わる共同体）のイ・ジェイヨン（ジェイ）さんが代表の韓国回復的正義協会（KARJ）が多数の国内実践者の認定研修を実施しています。実践者は、韓国内の犯罪被害者支援センターや学校、団地や分断・対立を経験したコミュニティで大変広く普及し、最近では警察にも導入されています。実はRJの思想は、最初に日本から学んだとジェイさんから伺ったこの韓国での発展の沿革は、前回PAX2023で、KARJのベテランのファシリテーターのユ・チスクさん、イ・ヒョンウ（愛称ブルース・リー）さんのRJ公開ワークショップで説明されました。前回参加者は被害者／加害者／関係者（PTA、高齢者福祉施設、地域住民）の5班に分かれ、ロールプレイを体験しました。

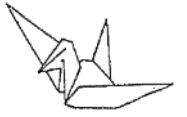
今回の講師はペ・ヒョンミンさんで、韓国の学校で修復的に生きるための教育のファシリテーターをされています。第1部は、学校で実践されている「修復的生活教育のための指導（RD）」と、その基礎を醸成する「平和感受性を高めるサークル（実際に車座になって行う）アクティビティ」を紹介してくださいました。前回ディスカッションの時間を30分程延長したことから、今回ディスカッションの時間を確保できるよう、事前に韓国での発展の歴史はスライドではなく、配布資料として頂きました。広島市生まれの権鉉基（こん・ひょんぎ）さんが午後の交流プログラムも含めて担当してくださいました。



事前公募で、午前は42名、午後の交流には34名が参加しました。講師は、当日の会場の反応から、まずRJの基本、なぜ実践が必要かを理解してもらうことが重要と判断され、予定よりQ&Aの時間を長く丁寧に取り、熱心な会場からの質問を受けられました。会場から30分延長の了解をもらい、PAXメンバーの使用言語に配慮した班編成で車座になって実際のミニサークルを体験しました。最後に全体で1つの輪になり、クロージング・サークルが行われました。【車座の意味】お互いが対等で平等な立場で参加できる環境とマインドセットを持つこと、【平和感受性を高めて、修復的アプローチにつなげる】2つの深い関連が大切であると学びました。今回も、第1部は2時間30分必要でした。



仁多米のおにぎりランチの後、所用のため一足先に帰国されるキム・キチャンさんをお見送りした後、午後は、「PAXメンバーとの交流」のセッション（ファシリテータ服部、通訳権鉉基さん）でした。アイスブレイキングは非言語コミュニケーションでのバースデー・ライン。一つの円から4サークルに分かれて、お互いの交流を深めていただきました。日本語、韓国語、英語が一堂に交わされ、多様な参加者による楽しい交流の時間になりました。最後は、再び一つの大きな円になって振り返るクロージング・サークルを行いました。皆様のご参加とご支援、温かなサポートに心から感謝いたします。



友 Yu-Ai 愛

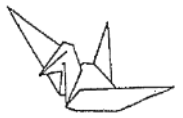
5月4日（日）午後、昨年韓国PAX2024の中で、PAX初期から積み上げてきたお互いの信頼と心からの友愛の交流の土台があるからこそ、1910年の「日韓併合」に始まる日本の植民地支配のもとでの辛く苦しい世代的経験をされた現地の方が思い切って、「日本人の友人達との交流はうれしい。しかし、私たちの世代は実際苦しい体験をし、心の奥にトラウマがあることも知ってほしい」と声を挙げてくださいました。その話し合いの最後にKOP Iの代表から次のメッセージがありました。「そのトラウマが日韓市民の関係に今も影響を及ぼしています。それこそが国家による侵略と暴力の実相なのです。PAXは私たちに必要な、生きた平和教育の場です。是非今後もPAXを続けていきましょう。」この経験から、今年のPAX2025で、4日間の振り返りを含めて2時間半のサークル・トークを提案し、担当させて頂くことになりました。

韓国PAXメンバーの来日前の自己紹介資料に、「この日韓関係についての対話に期待し、楽しみにしている、事前に読んだ方が良い韓国語の文献や資料があったら教えてほしい。」と書かれていました。その気持ちに誠実に応えるためにも事前に資料を探し、日韓の先達へ相談も行い、様々な選択肢や切り口を懸命に模索しました。韓国語の文献は、ジェイさんに相談しました。豊永恵三郎先生に相談したところ、当日先約あり、あいにく行けないが、在韓被爆者からのメッセージとその体験をまとめた冊子「ヒロシマへ・・・」（韓国語版）を紹介してほしいとご依頼があり、PAXメンバーに共有しました。歴史の教科書の比較や、メンバーの日常の気づきから話し合うことも検討しましたが、府中教会の大月純子牧師にも意見を伺い、最終的に今回国家代表についてのディベートより実際韓国PAXの来日後の体験を振り返り、自分にとっての日本・韓国という内面的対話の共有を試みることにしました。韓日逐次通訳は、大月牧師のご紹介で、広島朝鮮学校の前・教務部長の金令姫先生に快諾を頂きました。韓国PAXメンバーにとって、この金令姫先生との出会いも、また深く心に響く体験であったと終了後コメントがありました。



当日、今回の参加者（休養のために欠席の14歳のユンギョンさんを除くPAXメンバー7人とWFCワーキングチームメンバー）に冒頭、私たちの存在がここに見えるだけでなく、ここに至るまでに会った人たちの言葉や体験が、いま自分たちを作っているという視点、韓国をはじめ東アジアの平和構築において日本の市民が果たすべき責務と役割が重く大きいこととお話しました。今回のPAXのこれまで4日間の体験をふりかえり、特に印象に残った学び、気づきをカードに書き、共有する時間を持ちました。そしてクロージングでは、私にとっての韓国」「私にとっての日本」を振り返り、日韓の人びとの心のつながりを想い、日本（WFCコミュニティ）・韓国（平和ビル・コミュニティ）が歩みを進めることを確認しました。ひいては、アジアの平和的未来を描く共同体を視野に、日韓の市民の橋渡しとなる平和の共同体として、今後も交流を深め歩んでいくことを願っています。





韓国PAX参加者 ソン・チャンフン

「過去は現在のどんな助けになるのか？」 私はこの問いに対する答えを得たいと思いました。広島で6日間を過ごして、私は答えを得たでしょうか？作家は問いかけます。「なぜ世界はこんなにも暴力的で苦痛に満ちているのか。同時にまた世界はどうしてこんなに美しいのだろう？私たちの限界はどれくらいなのか？人間であり続けるためには、私たちはどれほど愛さなければならないのか？」 ヒロシマはそれを実践しました。

私が出た答えは3つのキーワードに集約されます。

最初のキーワードは「水の温度」です。ホストは毎日、湯船に温かいお湯を張ってくれました。夜には疲れを癒し、朝食はおいしいもので満たされました。ホスト夫妻の明るい表情は、天気と同じくらい私を明るくしてくれました。「どれだけ私たちが愛してくれるの？」

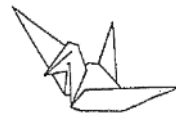
2つ目のキーワードは「記憶」です。「私は誰？ここはどこ？」 彼ら（私たち）は思い出したかったし、思い出さなければなりませんでした。アイデンティティは「記憶」が失われて初めて見出されるものです。私の故郷は南であり、私の国は北です。しかし、私たちの学校の記憶の中では、いまだかつて一度も分断されたことはありませんでした。彼ら、そこで学んでいる若い生徒たちは、強制労働の犠牲者の子孫であり、差別を受け続けてきた子孫たちです。「なぜ世界はこんなにも暴力的で苦痛に満ちているのか？」

3つ目のキーワードは「興味深いつながり」です。一粒の麦のように、バーバラという一人の人間から、WFC、PAX、修復的正義、平和構築の人々と私、ヒロシマ、そして原爆の廃墟で平和を叫ぶ市民が、こんなにもつながっていること。興味深い、不思議なつながりです。「同時にどうして世界はこんなにも美しいのだろう？」空間的に関連性があるので、詩人チョン・ヒョンジョンの絵のある詩集の中から、この「来訪者」の詩を日本語で紹介しました。



人が訪れるということは
実は、途方もないことである
その人は、自分の過去と、現在と、そして自分の
未来と共に来るのだから
ひとりの人間の一生が来るのである
壊れやすく、また壊れたこともあっただろう
心がやって来る そのひだを、
おそろく風なら、そっと撫でられるだろう心
私の心がそんな風を真似てみれば、
それこそ真の歓待になるだろう

「来訪者」 チョン・ヒョンジョン作



韓国PAX参加者 リュ・ヘソン（アンジェラ）

PAXプログラムで、私は3回ホスト役を務めました。PAXのメンバーとして参加した夫のドンウクは、いつも日本から客人が来るたび、「日本人のおもてなしはこんなに温かいものなのか、今回も家で料理を作ろう」と言います。おもてなしを分かち合い、おもてなしを受ける側になれて幸せでした。来訪者を待つ間に用意してくださった手間ひまをかけ、心を込めた一生懸命なしごと、そしてまた与えてくれた時間とエネルギー。WFCのスタッフの皆さんとメンバーの皆さんの愛に満ちた時間は、本当にありがたく温かいものでした。皆さんが韓国語で歌ってくださった歌は心に響きました。

そのおかげか、6日間の広島訪問を終えて、私の心はいつもオープンでした。韓国と日本が解決すべき歴史的な葛藤や痛みはいまだ続いています。WFCのメンバーのホスピタリティと広島で出会った人々は、葛藤や痛みを超えて、変容する力を見出すことができました。

これらすべての進行、構成、流れを綿密に計画してくれたWFCのスタッフとメンバーに心から感謝しています。今書き出してみると、5泊6日という時間の中で、過去・現在・未来の時間を共に夢見るような体験をすることができました。

そのすべての過程で用意してくれた料理も忘れられません。自宅で真心を込めて作った料理、そしてその料理の一つひとつを韓国語に名称を翻訳して説明してくれたメモまで。愛に満ちたおもてなしは、ここが安全な空間であることを全身で感じさせてくれました。おかげさまで、難しいテーマを抱えながらも、様々な人たちと出会い、豊かで有意義な時間を過ごすことができました。心から感謝しています。

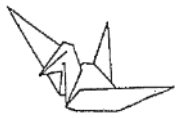


韓国PAXで夫妻をホストして スー・コックス

今年は、韓国のPAXグループからペ・ヒョンミンとパク・ミンジの2人を迎えることができました。WFCの館長として、これは私たちにとって素晴らしい機会でした。PAXチームとの交流は初めての経験で、どうなることかと少し不安でした。

私たちはバージニア州の自宅で交換留学生を受け入れたことがあるので、このような交流がどれほど素晴らしいものかは知っています。素晴らしいポットラックの昼食と歓迎パーティー、そして平和記念資料館見学の後に集まった私たちは、2人のゲストと楽しい夕食を共にし、会話も弾みました。韓国、アメリカ、そして日本についての話題で盛り上がりました。他国について学ぶことは、いつも自国を別のレンズを通して見る素晴らしい機会を与えてくれます。他国には自国よりも優れている点があることに気づくことは、どこの国の人であろうと他人を受け入れ続けるための重要な思考プロセスです。分かち合うことは、アイデアを生み、世界中に友情をもたらします。

6日間、私たちは何度か夕食を共にし、広島市内や近郊の観光地を巡りました。ホストファミリーになるのは、私たちにとってかけがえのない大切な経験です。もし機会があれば、次回ぜひホストファミリーに挑戦してみてください。素晴らしい意見交換と世界各国からの貴重な友情で報われることでしょう。



平和を築く友情

コリス・シー

「平和」とは何か？それを定義することは常に難しい。世界の状況を見ると、私たちが本当に平和であるとは言いがたい。しかし、それでも世界をより良い場所にするために貢献することはできる。

私はWFCのボランティアとして、韓国PAXの1日目から4日目のお昼まで参加した。以下は、そのPAXの私の概要報告である。

交流プログラム

2025年5月1日から6日まで、ワールド・フレンドシップ・センター(WFC)は広島で韓国平和大使使節団(PAX)との交流プログラムを開催した。今年は8人のメンバーが韓国から参加した。友情と平和に焦点を当てたプログラムを通じて、

平和とは分かち合い、思いやり、人と人とのつながりであるという概念を探究していった。この交流には、開かれた対話、広島の歴史について学ぶこと、観光などが含まれていた。

開かれた対話(オープン・ダイアログ)

開かれた対話を育むため、「修復的正義についてのワークショップ」では、参加者に修復的生活教育の指導の原則と教育への応用を紹介した。韓国、日本、そして海外からの参加者は、アイスブレーキングや双方向のアクティビティを通して、平和の感受性を高めるコミュニケーション、自己省察、相互理解を促すディスカッションを体験した。

さらに、韓国のPAXとWFCのメンバーが、4日間のPAXでの経験をもとに、日韓関係についての考察や洞察を分かち合うサークル・トーク・セッション(円座になって語らう時間)も用意された。

広島の歴史の学習

1945年に原爆が投下された広島は、今や平和の象徴となっている。その歴史を理解するため、韓国PAXは初日に平和記念資料館を訪れ、廃墟と化した街の写真や被爆者の体験談を通して原爆の影響について学んだ。

フラワーフェスティバルの期間中、広島女学院高等学校の生徒2人がボランティアで、韓国PAXの平和公園ツアーガイドを務めた。原爆犠牲者慰霊碑の意味から原爆ドームでの歴史の振り返りまで、彼女たちは詳しい説明を準備万端整えておこなった。特に、韓国人原爆犠牲者慰霊碑には、日本による植民地支配の間、そしてアジア太平洋戦争中の日本国内の朝鮮の人びとの状況を理解してもらうために訪れた。韓国PAXメンバーは、生徒たちの平和活動への献身的な姿勢に深い感銘を受け、有意義な交流の機会に感謝していた。歴史の学習は、事実からだけではなく、異なる世代や国籍間の人びとのコミュニケーションやつながりからも得られる。



観光

廃墟となったの広島街の大半は戦後に再建された。そのひとつが縮景園で、原爆によって破壊されたが、その後復元された。韓国のPAXとWFCのメンバーは、ツアーガイドがその歴史や建築的意義について説明する間、美しい景色を楽しみながら一緒に庭園を散策した。

そして出発の前日、一行は宮島を訪れた。



コリスさんありがとう♥また会いましょう

最後に

私が見た交流プログラムは、WFCと韓国PAXメンバーの双方にとって充実したものだった。双方の参加者は終始、真摯で献身的な態度で努力した。参加者たちは、言葉の問題にもかかわらず、互いに会話し、耳を傾け、気遣う機会を大切にしていた。交流のプロセス自体も実り多いものだった。

広大な世界の中では、個人は取るに足らない存在に見えるかもしれないが、平和はさまざまな背景を持つ人びとを結びつけることができる。分かち合い、思いやり、学び合うことで、平和な世界が生まれる。一人の人間が与える影響力は小さいかもしれないが、その愛の力は驚くほど大きい。

世界は人びとの愛のおかげで美しい。思いやり、分かち合い、つながることで、私たちは平和な世界を築く助けとなる友情を築くことができる。(香港から来た旅するボランティア コリス・シー)



ワールドフレンドシップセンター60周年記念

高杉ゆかり

ワールドフレンドシップセンターは6月に60周年の記念イベントを開催しました。

ワールドフレンドシップセンターの設立日は8月7日ですが、前日の8月6日に多くの行事があるため、バーバラ・レイノールズの誕生日と関連のある6月に開催しました。

そのイベントにあたり、アメリカの元館長達や関係者の方々から、祝賀のビデオメッセージを送ってもらいました。広島で開催されたその記念イベントで、私達はアメリカからのビデオメッセージを見ることができました。イベントのライブ配信をする予定だったのですが、配信がうまくいかず、数日後にアメリカに住んでいる何人かの人達に、インターネットを通じてそのイベントをビデオで見てもらいました。60周年記念イベントを共有できたということは、私達にとって、とても嬉しいことでした。

イベントのハイライトの1つは、天のたつしさんによる、井上ひさし作の「父と暮せば」の上演でした。「父と暮せば」は、天のさんが過去125回以上、上演してきた作品であり、JMSアステールプラザで、ライブで披露してくれました。大変素晴らしいものでした。天のさんは、この作品の上演を、すでにリタイアされていたのですが、この記念イベントのために上演を快く承諾してくださり、ミシガン大学から来日したグループにも、ウォーミングアップとして上演してくださいました。とても印象深い舞台であり、私達は、このひとり読み語り芝居を観劇する機会に恵まれたことを感謝しております。

ワールドフレンドシップセンターは1965年に設立されました。

日本の家庭では、カラーテレビよりも白黒テレビの方が多かった時代です。

飛行機旅行も現在ほど便利ではありませんでした。

もしバーバラ・レイノールズが広島に戻って来て、ワールドフレンドシップセンターと呼ばれているホスピタリティセンターをつくっていなければ、広島にワールドシップセンターは存在しなかったでしょう。海外のほとんどの人が、ヒバクシャという言葉さえ知らなかったその当時、彼女は広島で被曝者の方々に寄り添っていたのです。

私達は彼女に感謝しかありません。

ワールドシップセンターは、アメリカや世界中の方々からのたくさんの親切心で支えられています。そのサポートに心から感謝しています。

ご存知のように、この世界の中で戦争は終わっていません。

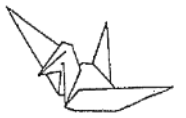
ある被曝者の方が「アメリカは私達のことばをとらなかったんだよ。」と、以前、私に話してくれた事を思い出しました。それは、日本が戦争で侵略して、その国の言語を奪おうとしたことを意味しています。

人間は何を間違ったのでしょうか。

世界には色々な考えがあり、人生は簡単なものではない、ということを私は知っています。ワールドシップセンターは温かく、居心地のよい、ホスピタリティセンターだと思うのです。ワールドフレンドシップセンターなら国境を越えて、世界中の人達と繋がることができます！ワールドフレンドシップセンターのメッセージをこれからの60年も生かし、伝え続けましょう！ワールドフレンドシップセンター60周年おめでとうございます！

WBC創立60周年記念行事
2025.6.14
JMSアステールプラザ





WFC 60周年に寄せて

田中ゆき子

WFC創立60周年という輝かしい節目を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。長年の皆様のご尽力に敬意を表します。

私は、6年前から7年前に、友人の天野達志さんにWFCを紹介していただきました。WFCの創立者のバーバラさんの「私もまた被爆者です」の英語の額を見上げ、共鳴し、WFCに入会しました。



6年前、天野達志さんの「父と暮せば」の芝居を初めて鑑賞した時、ものすごく驚きました。

彼の身振りは、とても上手で、Deaf（耳が不自由）の私にも分かりやすく、海外のゲストさんにも通じると感激しました。

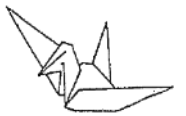
多くの海外のゲストさんたちに、本当の平和と友好の大切さがひしひしと伝わってくるひとり読み語り芝居を見せてあげたいと、願っている最中に、まさかのコロナ禍になってしまいました。

ようやく願いがかない、60周年イベントで多くの海外のゲストさんたちに、天野達志さんの芝居を見せることができ、真摯に鑑賞しながら泣き笑いした姿をみることができ、安堵しました。

今後も天野達志さんが来広され、多くの海外のゲストさん達に芝居を見せ続けてほしいと願っています。天野達志さんをご支援下さい。私もずっと応援していきますので、よろしくお願いします。

歴代館長、ジェシカさんの温かいメッセージを見て、感動しました。残りの人生をかけてWFCに尽くしてまいります。よろしくお願いします。WFC創立60周年、おめでとうございます。ありがとうございました。

田中ゆき子さんは呉在住で
いつもWFCに手作りのグッズ
を届けてくださいます。
ありがとうございます♥



WFCでのインターン

N. T. トラン（広島女学院大学国際英語学科）



この2ヶ月間、私はワールド・フрендシップ・センター（WFC）でインターンをさせていただきました。WFCでのインターンは、有意義な交流、異文化学習、そして仕事上でも個人的にも成長する機会に満ちていました。

最も印象深い経験のひとつは、WFC60周年記念行事を手伝ったことです。私はイベントの撮影を任せられ、貴重な瞬間を写真に収めた。最初は緊張しましたが、スタッフの励ましのおかげですぐに慣れました。また、ポストカードのデザイン、PAX募集チラシ英語版の作成、平和教育活動に関する文書の翻訳などにも携わりました。これらの仕事を通じて、語学・技術力だけでなく、異文化コミュニケーション能力も向上させることができました。

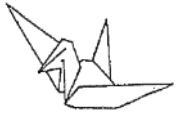
世界各国からのゲストに会い、WFCのシニアボランティアとともにイベントの準備を手伝い、被爆者証言をサポートすることで、私は「国際的友好」の本当の意味を実感しました。天野たつしさん親子にお会いできたことは光栄でした。「父と暮せば」の力強いパフォーマンスは、スタッフや学生たちを魅了しました。地域の皆さんと一緒に折り紙で人形を作ったのも楽しかったです。小さな行動は思いやりとつながりに満ちていました。



多くのインターンがそうですが私も困難に直面しました。学業とインターンを両立させるのは簡単ではありません。しかし成功した時も難しかった時も、どの経験も私に回復力、忍耐力、そしてチームワークの大切さを教えてくれた。小さな誤解や技術的な問題に直面したときでさえ、WFCスタッフの優しさとサポートが、なぜこの組織が重要なのかを思い出させてくれました。

ベトナムから広島に留学している学生として、WFCの平和活動に貢献する機会を与えてくれたことに心から感謝しています。このインターンシップは、平和、歴史、地域社会に対する私の理解を深めてくれました。WFCの精神を、これからの勉強や仕事にも生かしていきたいと思います。

友情と学びの場を与えてくれたWFCに感謝します。



8月6日 特別企画 被爆証言 と マーシャル諸島から報告 田口知鶴子

WFCは今年創立60周年を迎えた。基本活動「被爆者の話に耳を傾け、世界に原爆の実相を知らせる」の理念に沿って、WFCは毎年8月6日に被爆者を招いて、証言を聞く会を催してきた。昨年(2024)は日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、証言を続けることの意義が再確認されたが、一方で、高齢化により証言者の数は激減し、直接証言を聞く機会は急速に減りつつある。また、世界では、核実験によって侵された国や島が、その後の実情がどうなっているのか、知る機会も少ないのが現状である。

今年は、エソール広島で、近藤康子さんの被爆証言と、核実験で故郷を破壊されたマーシャル諸島からの二人による報告の、2本立ての特別企画を実施した。

通訳は20年以上広島在住で、間髪を容れぬ流暢な表現力と明解で豊富な語彙の持ち主の、カール・ワーソップさんをお願いした。約70人が会場に集い、その中には、留学生やマーシャル諸島関係の若者も多く、真剣な質疑応答が、時間いっぱい続いた。

近藤康子さんは、4歳の時、32歳の母と9か月の妹の3人で、爆心地から3.5kmの高須の叔父の家に疎開していた。原爆が炸裂した瞬間、ギャッと泣いた妹の、開いた口の中に、ガラスの破片がバラバラと飛び込んだという話は、思わず息を飲んだ。8月9日に祖母を探しに3人で江田島まで船で渡り、兵学校でついに祖母を見つけた話や、呉の母の実家に身を寄せ、主食の薩摩芋・海水から作った塩などで暮らした様子など、パワーポイントを使ったり、どくだみ草・赤い鼻緒の藁草履・ほおづきなどの現物を見せながら、非常に分かり易く説明された。同級生が小学6年の時、突然白血病で亡くなったこと、就職・結婚で差別を受けた経験など、溢れるほどの、本当に貴重な体験を手取るように次々と語って戴き、原爆の恐ろしさを改めて感じた。



マーシャル諸島の二人は、「核のトラウマ 再起する力」のテーマで報告された。

ロビン・ヌルンさん(シアトル大学准教授)は父親がマーシャル諸島からの移民、ナターシャ・ノートさん(エベレット・コミュニティ大学在学中)は両親がマーシャル諸島出身。米国は、1946年からの12年間に、マーシャル諸島で67回の水爆実験を強行し、特に1954年にビキニ環礁で行われた実験は、広島型の1000倍の威力の、最大の爆弾であった。子供たちに白い灰を雪と間違させた放射性降下物は、近隣の島々に拡散し、生涯にわたる癌・生殖器・甲状腺障害などの健康被害を引き起こし、また、放射性廃棄物の不完全な処理が海洋汚染につながり、二次的健康被害による先天性異常の出産など、世代を越えた、核実験の影響が続いている。生存する権利を取り戻して核のトラウマを打破し、歴史から抹消された故郷の文化復興、正義の補償と回復に立ち上がり、核兵器のない世界を目指して活動を進め、青少年の核に対する批判的意識を育成している。

原爆が落とされて80年目の今年、世界で戦争が頻発し、核戦争の危険さえ高まっている。すべての地域社会が連帯して、核を取り除く取り組みを急がなくてはならない。

